

肺容量減少術を実施した重症 Chronic Obstructive Pulmonary Disease 症例の術後経過

吉村 力¹⁾ 久良木隆繁³⁾ 豊島 秀夫¹⁾
白石 素公¹⁾ 渡辺憲太郎¹⁾ 吉田 稔⁴⁾
岩崎 昭憲²⁾ 白日 高歩²⁾

- 1) 福岡大学医学部呼吸器内科
- 2) 福岡大学医学部呼吸器・乳腺・小児外科
- 3) 福岡大学筑紫病院第二内科
- 4) 村上華林堂病院

要旨：症例は60歳の男性．労作時呼吸困難を主訴に入院．Chronic obstructive pulmonary disease (以下 COPD) 最重症と診断されたが，内科治療にても改善はなかった．National Emphysema Treatment Trial (以下 NETT) に準じた Lung volume reduction surgery (以下 LVRS) 適応基準を満たし，LVRS を施行した．FEV_{1.0} は LVRS 2 カ月後に改善した．その後徐々に漸減傾向を呈しているが，術後3年後でも依然として術前値よりも高い値を維持できている．また，6 分間歩行試験において，LVRS 後は歩行距離が現在も漸増している．重症 COPD 患者に対して内科治療に加え，LVRS を施行することで，3 年経過しても呼吸機能，運動耐容能，QOL が改善した症例を経験した．LVRS の有効性の再認識が必要である．

キーワード：慢性閉塞性肺疾患 (COPD)，肺容量減少術 (LVRS)，呼吸機能検査，6 分間歩行テスト